

速度標語について

水谷 知久

A Study of the Tempo Indication

Tomohisa Mizutani

(1) 序 論

楽曲にはそれぞれその楽曲の性質と内容を最も美的に表現するに適した固有の速度がある。速かに奏すべき曲を緩かに演奏した場合には、その曲の迫力は失われ、緩かに奏すべき曲を速かに演奏した場合には、その曲の優美さは失われてしまう。速度は楽曲の表情を規定する重要な要素である。Tempo と云う語は音楽の速度の意味であると考えられているが、厳格に云えば、「リズムの速度」と考えた方が良い。リズムは音符の長短の比例及比重を示すが長さの絶対値を示さない。この絶対値を規定するのが Tempo である。楽曲の速度が規定されたのは14世紀頃 * からであって、最初は「緩かに」「中庸に」「速かに」の3種に大別された。中庸の速度とは如何なる速度を云うかを規定すれば「緩かに」「速かに」が自ら規定される。我々は中庸の高度、強度、速度についての概念を持っている。ものを計るに当っての中庸さ、程よさは人間性に基くのである。C'の近くの高さの声は老若男女すべての声に共通である。それ故にこの音が高低判断の出発点と解せられる。普通の談話の強さから、強い音、弱い音の限界を感じ得る様になり、又常態に於ける脈膊の速度から「中庸の速度」の観念が出来たのである。しかし速度の観念は、その人、その民族、その時代によって差異がある。同じ速度を多血質の人は粘液質の人よりも緩やかに感じて、より速い速度を要求し勝ちになる。故に標語による速度の規定は極め

* 14世紀初葉の英国の音楽理論家 Johannes de Muris 1350? が Tempo には「速い」「遅い」「中庸」の3種があることを述べている。(小泉治書 "音楽辞典" 607頁)

て漠然としたものであることを否定出来ない。ウィーンの楽器製作者であり、かつ音楽教師でもあった Johan Nepomuk Mälzel (1772—1838) が1816年に Metronom (拍節器) を発明して以来、音符の時価の絶対値を正確に設定する事が出来る様になった。＜このメトロノームを最初に使用したのはメルツェルと親交のあったベートーベンである。彼は1817年第八交響曲の各楽章に速度の楽語と共にメトロノーム記法も加えて発刊した＞。(＜内は田村範一著“音楽概論” 27頁による。)

しかし、音楽の演奏は Metronom の運動に器械的に従うものではない。演奏に際しては“速度 (Tempo)” 以外に“速度の変化” (Agogik) 或は rubato も必要である。Metronom は楽曲の主たる速度を規定するに過ぎない。

前述の様に Tempo の普通感覚は人間性によるものであるが、通常楽曲の初めに標語を附してその速度を表わすのである。この名称にはイタリー語を用いるのが数百年来の慣習である。19世紀以降自国語で速度標語を記す作曲家も輩出したが(“ドイツ語…シューマン、ワグナー等” “フランス語……ベルリオーズ、ドビュッシー等”) 本稿ではイタリー語の標語のみを対象として述べる事にする。前に速度は“速かに” “中庸に” “緩かに” の3種に大別されると述べたが、基本の速度は次の3つの名称で代表せられる。

Allegro→Andante→Lento

猶此の外にも緩急を表わす言葉があり、或は促進的、或は阻止的の意味を表わす副詞的用語があり、更に表情を示す発想記号と共に記される場合もある。

次章以下に於て一般に用いられている速度標語を“中庸なる速度” “緩徐なる速度” “急速なる速度” に大別して述べると共に更に著名なる楽曲中に、どのような速度標語が用いられているかを検討する事にする。

(2) 中 庸 な る 速 度

中庸なる速度を示す標語には Andante 及 Moderato がある。

Andante は中庸なる速度を示す基準の標語として用いられて来たが現在の我々には稍遅く感じられる様である。Andante が実際にはどれ位の速度を示すかについても種々異説がある。数種の文献により Andante についての説明

事項を抄録し、それを検討する。

1. {Stephen Krehl 著 Allgemeine Musiklehre} pp. 189
信時 潔：片山穎太郎共訳 音楽通論

＜中庸なる速度には先づ Andante が用いられる。この Andante はメトロノームによれば、1分間に約72—80の速さである。Andante は歩行の速さをいうので、従って、決して、よくしばしば主張された様な緩徐なる速度ではないのである。脈搏に相応せる常態の速度がこの標語によって表わされるのである。＞

2. 伊庭 孝著 “大楽典” pp.199

＜中庸に遅き速度

Andante 歩む位に

Andantino 是は Andante の縮少辞であるから、元来は Andante より少し遅き意味である可きであるが、誤用されて、稍速き速度を表わす言葉となっている。＞

3. 真篠俊雄著 “音楽通論” pp. 40

＜稍遅きもの andante 歩行の速度。

Andante は急速と緩徐の中間にあって、系統は後に属し、楽曲の性質は激烈でないのを常とする。メトロノームによれば一分の中約70より80の速さで脈搏に相応する常態の速度が、この標語によって表わされるものである。＞（猶44頁には T. H. Bertenshaw による……として andante は M.M. 60 と記されている。）

4. 門馬直衛著 “楽典解説” pp. 111

＜Andante……歩き乍ら。普通に歩くように。即ち最も普通の速度で、之は普通に考えられているような、ゆるやかにと云う意味を持ちません。

Andantino……Andante の縮少形、元来は Andante よりもおそい速度を示したが、今日では反対に、多少より速い速度を指します。＞

5. 田辺尚雄著 “音楽通論” pp. 49, 52.

＜普通に大人が無心で歩いている時の一步の長さを平均したもの、或は軍隊の行軍の時の一步の長さを一拍と定め、この速さを Andante と呼び、これを標

準としてそれよりも速い場合と遅い場合とを区別して……中略……

Andante 一拍が行軍の時の速さと同じ (pp. 49)

Andantino Andante よりも少く速く (pp. 49)

Andante 一分間に四分音符が 115—125 (pp. 52)

Andantino 一分間に四分音符が 90—115 (pp. 52)

ここにあげた数字は正確にその範囲を規定したものではなく、大体その位の
間を指しているのであるということを示したに過ぎない。＞

この田辺氏の著書の49頁には Andantino は Andante よりも少く速くと
記されていて、52頁のメトロノームの拍数による表では Andante が1分間に
115—125、Andantino は 90—115 と記されていて記載事項が逆になっている
が、之は単にミスプリントであるとは云えないのである。この事に関しては後
に論じる事にする。

6. 属 啓成著 “楽典と楽式” pp. 73.

＜おそいテンポをあらわす標語

Andante 並足の速度で。これは andare (歩く) という動詞から来た標語
で、急がず気楽に、すらすら足を運ぶ速さでよい。Andantino と縮少形にす
ればアンダンテよりはいく分速いテンポとなる。＞

7. 山県茂太郎著 “音楽通論” pp. 82.

＜ややおそいもの

- { Andante 歩むくらいの速さ、ゆるやかに。
Andantino アンダンテよりもはやく。

8. { Lobe : Neumann共著 “Katechismus der Musik” } pp. 79
{ 橋本清司訳 “問答形式による音楽通論” }

＜ゆるやかな速さのもの

Andante 歩くような速度で

Andantino Andante よりややはやく＞

9. 小泉 洽著 “音楽辞典” pp. 25

＜Andante 歩行するの意、併歩調、極めて遅い速度 80M.M. 位の速度。＞

10. 音楽之友社編 “音楽辞典（楽語篇）” pp. 18.

<アンダンテ 動詞（andare=歩く）から来たもので、歩くくらいの速さで。
アダーヂ ♩ とアレグレットの間。>

11. 研究社 “新簡約英和辞典” pp. 63

<andante 歩くような速さで、並歩調、緩徐調。>

12. John Purves “A Dictionary of Modern Italian” pp 24.

<andante……current（一般に行われている）； instant（緊急の）； smooth going（すらすらと円滑に行く）； uniform（同一標準の、一定不変の）； steady（安定した）； continuous（絶え間ない）； un—broken（くじけない）； plain（明白な）； everyday（平凡な）； cheap（安直な）>（日本語訳は上記の研究社の新簡約英和辞典による。）

次に GROVE の音楽辞典146頁の Andante の項より一部抄訳する。……
<此の語は主として少し遅い速度を示すのに用いられている。以前には、より一般的にその文字通りの意味に用いられた。この事について、我々はヘンデルの音楽の中に、しばしば Andante allegro と指示されているのを見出す。…
…略……又修飾語として他の語に附加される。 Andante sostenuto は単独の Andanteよりは少しゆっくり目であり、Andante un poco allegretto 或は Andante con moto は少し速めである。……略…… Andante それ自身は歩度の決定を指示しない。誰も piu andante がより速くなるのか、よりおそくなるのかを推定する事は出来ない。>

元来“歩く”の意味だから more walking の語では速くなるのか遅くなるのかわからない筈である。

Krehl の音楽通論には Andante は一分間に約72—80の速さであると記されているが、田辺氏の音楽通論には115—125と記されAndantino が90—115と記されている。

真篠氏の音楽通論には Andante が70—80、小泉氏の音楽辞典には80位と記されている。此の様に異論があるが70—80位の説が多い様である。速度標語を

この様に一般にまとめてメトロノームにあてはめるのは誤っていると思うがこの事については後に述べる。

多くの理論書では *Andantino* は *Andante* よりも稍速い速度として扱っているが、伊庭氏の著書にもある様に *Andantino* は *Andante* の縮少形の語であるから *Andante* を遅い速度と考えれば、*Andantino* は遅さの少い程度の速度、即ち *Andante* よりも稍速い速度と考えられるのである。しかし *Andante* を中庸の速度と考えればその速度の縮少形である *Andantino* は *Andante* よりも遅い速度という事になる。小泉氏は音楽辞典の *Tempo* の項の中で次の様に述べている。

<pp. 607…… 此等の伊太利語は該語そのものの字義よりして各 *Tempo* の差異を指示せる代りに、唯当時行われていた習慣に従って使用されたに過ぎない。故に *Andantino* は *Andante* より稍遅いという字義の語であるにも拘らず、これを全然反対の意味に使用していた。>

田辺氏が49頁には *Andantino* を *Andante* より速い速度と記しているのは慣行によるものであり52頁のメトロノームの数字では *Andantino* の方が遅い数字になっているのは、前記の伊庭氏の著書によって明らかな様に元来の字義によっているものと解することが出来る。縮少形の速度標語は *Tempo* が縮少されるだけではなく、曲そのものも縮少形の曲、即ち小曲につけられる速度標語と考える事が出来る。この事は後述の *Allegro* と *Allegretto* 等の関係にも当てはめる事が出来る。*Krehl* の音楽通論190頁には次の様に記されている。<縮少形は速度について云うよりは、むしろ楽曲の結構について用いられるのである。即ちこの語は規模の小さい楽曲に用いられるのである。 *sostenuto*, *andante sostenuto*, *andantino*, という記号は *Largo*, *Lento* 等の如くに幅広い速さであることを要しないのであるが、やはり緩徐なるテンポの種類に属する。*Andantino* は *Larghetto* と同様に小曲を暗示している。*Andante* に比べて、*Andantino* は速さが控え目である。>

上記の数著書で紹介したように、一般の多くの理論書では何れも *Andante* を稍遅い速度として扱い *Andantino* をその“遅さ”の縮少形と見て *Moderato* よりも稍遅く *Andante* よりも稍速い速度として扱っている。信時潔氏の標準

楽典教科書38頁には次の様に記されている。

＜普通の歩行の速度、即ちやや、遅き速度……Andante。普通の速度……Moderato, Andantino。＞

GROVE の辞典によれば……Andantino……Andante が文学上では“歩く”を意味するのと同様に、その縮少形は“多少歩く”の意味、即ちそんなに速く歩くのではなく、本来の意味では Andantino は Andante よりも幾らか遅い目の速さを指示することを意味しなくてはならない。所が大多数の作曲家はこの言葉の意味を“遅い”と同様に考えて、andante を“多少遅く”、andante よりも幾らか速いものとして用いている。……略……＞

上記の諸学者の説の中、小泉氏の辞典には andante を“極めておそい速度、80M.M. 位”と記されているが、80M.M. は我々には極めておそい速度とは思われない。クレール及門馬氏は“緩徐ではない”、“ゆるやかにと云う意味を持たない”と、わざわざことわっている。しかしクレールはM.M. 72—80と記している。この速度は現在の我々には少し緩徐に感じられる。田辺氏の“普通に大人が無心で歩いている時の一步の長さを平均したもの”には同意出来るが、その次に続けて記されている“或は軍隊の行軍の時の一步の長さを……”には同意出来ない。私は行軍の速さは少くとも moderato 或はそれ以上の速度と考える。多くの著書で“少し緩徐な速度”として扱われているが、結局andante は普通の速度の意味であったが我々の普通の速度の概念が文明開化にともなって脈搏の速さよりも速くなったために、andante は現代の我々の歩調よりは“少しく緩かに”なったと考えられるのである。我々が無念無想で散歩する時の歩調と考えれば良いであろう。

Moderato は中庸の速度として扱われている説が多く異議は少いが、中には速い速度の範疇に入れられているのもあるので Andante の場合と同じく、数種の理論書の記載事項を抄録する。（著者名を記し、書名は略す。）

1. Krehl pp. 191

＜Moderato 中庸の速さで

Allegro moderato 速かに、しかし程よき程度にて。

これ等の標語をもって速き速度の記号が、はじまるのである。＞

2. 伊 庭 pp. 199

＜中庸の速度

Moderato 是は脈搏位の速度であるから1拍が1分の60乃至80分の1に当る。＞

3. 真 篠 pp. 40

＜Moderato 中庸の速度で。＞

4. 門 馬 pp. 111

＜Moderato 普通に；之は元来他の語と共に用いられました。例えばAllegro moderato（余り甚しくなく普通に急速に）はその一例です。然し今日では、独立的に余り速くもなく、余りおそくもない普通の速度を指示します。之はAllegro moderato の略だそうですが今日では Andantより少し速い位に解されています。＞

5. 田 辺 pp. 49

＜Andantino, Moderato……Andante よりも少し速く。＞

6. 松本民之助著 音楽通論 pp.115—116

＜モデラート 普通の速さで。

速度標語では実にあいまいな範囲より限定出来ない。レントは非常にゆっくりと言っても、一体非常にゆっくりと云う解釈を万人一様にびたりと限定するわけにはいかない。そこで大体の標準をきめてかからねばお話にならない結果になるので、現在ではモデラートの速さを大体1分間70から80位に決めている。これは丁度大人の脈の速さ（平均72）である。＞

7. 属 pp. 73

＜Moderato 程よい速さで。中庸の速さで。元来の意味は、節制ある、適度の、中庸の、おだやかな、といった言葉であって、アンダンテがゆるやかなテンポの境だとすれば、モデラートは急速なテンポの始まる境にある。なお、これは Allegro moderatoのように、他の速度記号と結合して使用される場合もある。

8. 山 県 pp. 82
<Moderato 中ぐらいのはやさ。>

9. 橋 本 pp. 79
<Moderato 中ぐらいの速さで。>

10. 小 泉 pp. 355
<Moderato 中庸の速度にて、常に中庸の“速さ”のことを意味し、中庸の“遅さ”に就ては意味しない。故に Allegro moderato の略語として使用される。>

11. 音楽之友社編 pp. 495
<モデラート 中ぐらいの速さ。アレグロ・モデラートは程よい速さ。>

12. 研究社 pp. 1160
<moderato ほどよい速度で。>

13. John Purves pp. 258
<moderare……moderate (適度に、穏健な)。check, curb (抑制)。mitigate
allay, slaken (和らげる。)>

上記以外に中庸なる速度の中に“Maestoso”を含めている説もあるが、(属啓成著 楽典と楽式) Maestoso は威厳のある、荘厳な、荘重な、堂々とした等の意味を持っているので、発想標語の要素も多いので、ここでは特別にとりあげないことにする。何れにしても Moderato が Andante よりも速い速度であることは確かで、前記の Krehl の音楽通論では Moderato は速い速度の部類に含まれている。……pp. 191<Moderato, Allegro moderato……これらの標語をもって速き速度の記号がはじまるのである。本当の鼓舞興奮的な速さは Allegro によって表わされる。……>

GROVE の辞典によれば……抄訳……<Moderato (イタリア語で、適度に、中位にの意)。

この指示用語は単独及他の速度用語の修飾の二通りに用いられる。allegro moderato, Adagio moderato 等の如く。その時には本来の指図の力を軽減す

る働きを持っている。即ち Allegro moderato は単独の Allegro よりは少し緩やかであり、Adagio moderato は単独の Adagio より僅か速い目である。

Andante moderato はどうしても不明確で、速度を指示する用語としては適当ではない。>

門馬氏と小泉氏の著書には Moderato は Allegro Moderato の略語であると記されている。小泉氏の辞典の Allegro moderato の項(pp.17) には Allegro moderato……中庸のAllegro にて……と記されている。中庸の Allegro と云うことになると Allegro の意味になって、速い速度の範疇にはいってしまう。前記の Grove の辞典には Allegro moderato は Allegro よりも少し遅い速度とは記されているが Moderato より少し速い速度とは記されていない。しかし一般には Allegro moderato の方が Moderato よりも少し速い速度として扱われている。Andante を散歩の歩調とすれば、Moderato は、普通に用件があって歩いている時の歩調と考える事も出来る。

(3) 緩 徐 な る 速 度

上述の著書中に Andante を緩徐なる速度の範疇に入れているものも相当数あるが、この項に於ては andante よりも、ずっと遅い速度をあらわす標語の中の代表的なものとして、Largo, Lento, Grave, Adagio についての諸説を調べる事にする。

1. Krehl pp. 189

<緩徐なるテンポには下の如き語が用いられる。

Largo	幅広く	
Lento	緩やかに	
Grave	重々しく	
Adagio	緩やかに	以下略 >

2. 伊 庭 pp. 199

<最も遅き速度

Grave 最も遅く重く

頗る遅き速度

Largo 遅く、広く

Adagio 静かに、遅く、

Lento 遅く、ゆるく、

3. 真 篠 pp. 39

< Largo 幅広く、緩かに、

Lento 遅く、

Grave 遅く且堂々と、

Adagio 緩徐に、

4. 門 馬 pp. 110

<Adagio 緩徐に；少し物うい位にゆるやかに

Grave 重々しく、莊重に、引きずるように；普通に Adagio よりもおそい速度を示します。

Largo 壮大に、堂々と、非常におそく；普通に Adagio よりもおそい速度を示します。

Lento 長く、非常におそく。

5. 田 辺 pp. 49

<Largo, Lento, Grave 非常に緩くした速さで、Larghetto, Adagio 緩くした速さで、>

6. 属 pp. 72

<次に示す四種の標語は、ゆっくりしたテンポをあらわす代表的なものだが、同じおそいといっても感じの上でそれぞれに相違がある。

Largo ゆるやかに。この語には幅の広い、のびのびした、自由な感じがある。

Lento ゆっくりと。この語には、のろい、鈍い、気楽なゆっくりした感じがある。

Adagio ゆるやかに。この語には落ちついた、静かにの意味がある。慣習的に幻想ゆたかな、ゆっくりした曲にもちいられ、ベートーベンの室内楽や、交響曲のゆっくりした楽章に多く使用されている。

Grave これもゆっくりした速度記号としてもちいられるが単なる “ゆっく

り”のほかには重々しい荘重な、まじめな厳然さをあらわす意味がある。

以上四つの語は、どれがどれよりどの位ゆっくりするということは、はっきりいえない。それぞれの楽曲の内容や感じに従って、どれを選ぶべきかを決めるべきである。それ以上にはっきりさせたい場合はメトロノーム記号が併用される。

7. 山 県 pp. 82

<Largo はば広く、ゆっくりと

Lento ラールゴと同じはやさ

Grave 重々しく、ゆるやかに

Adagio ゆるやかに

8. 橋 本 pp. 78

<Largo 幅広く、遅く

Lento 緩慢に

Grave 重々しく

Adagio ゆるやかに

9. 小 泉 pp. 308, 314, 234, 8.

<Largo あらゆる速度記号中に於て、最も遅い速度を示す発想記号、Adagio よりも遅い速度を示す。全楽曲中、Largo で終始するようなことは極めて稀で、シンフォニイ曲などの序曲に於て、短い部分に丈これを置くのが例になっている。

Lento 緩徐、Largo と同じ速度、

Grave 遅く且荘重に、荘厳に、ゆっくりと、

Adagio 遅き速度、Andante より遅いもの

10. 音楽之友社編 pp. 506, 524, 164, 5.

<Largo 幅広くゆるやかに

Lento 気楽におそく

Grave 重々しく、荘重におそく

Adagio ゆるやかに（静かにおそく）

11. Purves pp. 229, 232, 186, 9.

<Largo. wide; broad (幅の広い), large (大きい), ample (広大な), loose (ゆるい), easy (気楽な), liberal (大まかな), slow (遅い、のろい)。

Lento. slow, sluggish (ぐずぐずした、のろのろした), slothful (怠情な) loose, slack (ゆるい、だれた)。

Grave. heavy, bad, weighty (重い), serious (まじめな、重大な), stern (厳格な), difficult, painful (困難な), grievous (悲しい、苦しい), dangerous (危険な), great (壮大な)

Adagio. slow, slowly (遅い、のろい), softly (静かに、おだやかに)。

次に GROVE の辞典より一部分を抄訳する事にする。

< pp. 54 Largo……遅い、広い、威厳のあるスタイルを指示する。……中略……ラールゴは遅い歩度を意味するが、歩度を決定することはその主目的ではないのである。>

単に遅いという速度を指示する為には次の Lentoの方が適當であると思う。抄訳を続ける。

<pp. 130 Lento……遅いAndante と同様の歩度及びスタイルを意味する指示用語である。

pp. 47 Adagio……“気楽な、気長な”。此の用語は遅い速度を示すのに用いられているが比較上の速度について音楽家達の間に普及している意見に大きな相違があるのは不運なことである。17世紀には Adagio は後の時代よりも明白に、遅い歩度を示した。Clementi によれば Adagio は総ての速度の中で最も遅い速度であった。相当多数の現代の大家達は、Largo が最も遅く、Grave を第二、Adagio を第三と見做しているが、一方他の人達は Grave, adagio, largo の順序を与えている。それ故この事についての絶対の法則を与えることは不可能であるが、Adagioを一般の用語の中から“非常におそく”をあらわすものとして確定する事で満足しなくてはならない。……略……。>

上記の中、伊庭氏はGrave を最も遅い速度とし、小泉氏は Largo を最も遅

い速度としている。その他は概ね Largo, Lento, Grave を最も遅く Adagio をそれよりは僅かに速い速度としている。同じ“遅く”ではあるが、Grave は重々しい遅さ、Lento は気楽なゆったりした遅さ、Largo は広大なのびのびした遅さ、Adagio は静かな遅さを示している。Largo (廣大), Lento (弛緩), Grave (厳然), Adagio (静粛)と云う事が出来る。Larghetto Adagietto 等の縮少形の用語があるが、之等は本来のものよりも幾分か軽い(速い)速度を示す。

(4) 急速なる速度

急速なる速度を示す標語中より Allegro Animato, Vivace, Presto, の語について、前と同様に各著書のその項を抄録する。

1. Krehl pp. 191. 192.

＜鼓舞興奮的な速さは Allegro (元気よく、快活に) によって表される。

これよりもっと程度の進んだ速さの標語は、Vivace (速かに), Vivacissimo (非常に速かに), Allegrissimo (極めて元気よく); Presto (急いで) Prestissimo (出来るだけの速さで) ……以下略＞

2. 伊 庭 pp. 199. 200.

＜中庸に速き速度

Allegro 軽快に速く

頗る速き速度

Animato 活気を以て速く

Vivace 烈しく速く

Presto 頗る速く

＞

3. 真 篠 pp. 39, 40

＜Allegro 速く且愉快に

Animato 活気を以て速く

Vivace 快速に…… Vivace が速度標語として単独に用いられた時は頗る速くアレグロの意であり、若し形容詞として使用される時は“生々とした”或

は“晴々とした”の意となる。

Presto 急速に

>

4. 門 馬 pp. 110

<Allegro 快活に、愉快に、活潑に、従って急速に、……普通に用いられる指示語の中では最も速い速度を示します。Allegro vivace は、それよりも尚速く、活潑に。

Presto 急速に、Allegro よりも速く。>

5. 田 辺 pp. 49, 93, 98,

<Allegro 可成り速く

Animato 生々として快活に

Vivace 活潑に速く

Presto 非常に速く。>

6. 属 pp. 74

<急速なテンポをあらわすもっとも主要な標語には次のような三種がある。

Allegro 速く、この語の元来の意味は、愉快的、面白い、楽しげなどといったもので、これを形容詞変化の最上級の形として Allegrissimo とすれば、さらに速くなり、他の副詞を附加して Allegro con brio (生氣をもって速く)、Allegro appassionato (熱情的に速く)、Allegro moderato (適度に速く) のようにして使用することも出来る。

Vivace 快速に。これは軽快な、生き生きした——といったのが元来の意味で、軽快に流れるような楽曲に用いられ、速度としては、Allegro よりも速い。

Presto 速く。元来の意味は“速い”とか“急に”とかの意で、テンポとしては Allegro よりも Vivace よりもさらに速い記号である。>

7. 山 県 pp. 83, 86.

<Allegro はやく、活ぱつに

Animato 生き生きと

Vivace 生き生きと

Presto はやく

>

8. 橋 本 pp. 79

<Allegro 快活にはやく

Animato 生氣はつらつとして

Vivace 活潑に、快活に、

Presto 急速に。>

9. 小 泉 pp. 16, 28, 694,

<Allegro 元気に、活潑に、速く。バッハはこの文字を今日の意味とは多少異なる意味で使用している。而して常に con moto, conbrio, vivace 等の語を結付けて使用したが、大体に於て、今日解されているよりも幾分遅い速度を意味したようである。

Animato Con anima (元気を以て、精神をこめて) と同じ。

Vivace “活潑に” の意、楽曲の Tempo を指示する語としては allegro と同じ。

Presto 急いで、速く。>

10. 音楽之友社 pp. 17, 40, 446,

<Allegro 快活に、活潑に、賑やかに、

Vivace 非常に速く、いきいきとした。

Presto 急速に、アレグロより速い。>

11. Purves pp. 18, 435, 311.

<Allegro…… cheerful ; merry ; gay ; lively ; (元気のいい、楽しい、活潑な……等)。

Vivace lively ; vivacious ; sprightly ; gay (元気な、活潑な、陽気な) ; quick (速い、急速な、生き生きした、活潑な)。

Presto……quick ; prompt ; soon ; early ; quickly (早めに、急いで……等)。>

allegro と vivace とが同じであるとの説もあるが大体 allegro, vivace, presto の順に速さを増すものと解することが出来る。allegro, animato, vivace は “快速に” presto は “急速に” と解すれば良いであろう。

(5) 速度標語と Metronom との関係

速度標語が単に音楽の速度を規定するものであれば、標語よりもメトロノームによる速度を指定すれば、はるかに明瞭に速度を指示する事が出来る。しかし速度標語は速度だけを指定するのではなく、曲の性格をも規定するものである。

＜速度という語は二つの非常に異った概念を包括している。一つは生理学的速度であり、他は心理学的速度である。(Curt Sachs……Rhythum and Tempo pp. 34)＞。

メルツェルがメトロノームを発明した頃のベートーベンのメトロノームによる速度の指示は必ずしも適切であったとは言えない。

＜ベートーベンのメトロノームの指示は往々にして我々を当惑させる。

(Grove 音楽辞典 Tempo の項)＞

＜メトロノームの過誤……メルツェルの機械には数字の外に之と列べてLargo, Larghetto, Adagio, Andante, Allegro, Presto 等の言葉が指定してある。

Largo	M. M.	40—72
Larghetto	M. M.	72—100
Adagio	M. M.	100—126
Andante	M. M.	126—152
Allegro	M. M.	152—184
Presto	M. M.	184—208

此の指定数字は今日一般に了解されている速度と用語との関係を比較すると、ばかばかしく早いもので100—126は adagio となっているが、吾々は此の速度は allegro だと思っている。こういう風であるからメルツェルの機械は数字だけを信頼すべきで、用語は総て誤であることを知らねばならぬ。なお又、楽曲の冒頭に、メトロノームの数字が明細に記載されているものでも、それを固守することが不適当な場合がないではない。チェルニイ (Karl Czerny 1791—1857) が自作の曲や先輩の曲に附したメトロノーム数字のうち早きに過ぎると思われるものもある。ベートーベンのシンフォニーでは adagio など

のメトロノーム数字が一般に早すぎる傾向がある。是等は奏者の美的考察によって適宜の速度を執る可きである。(伊庭孝著 大楽典 pp. 203, 204)。

真篠俊雄氏もその著書の44頁に於て、メルツエルのメトロノームの標語に対する数字は“今日了解されている速度に比して甚しく早いものである”と論じ、更にT. H. Bertenshaw による速度標示をあげている。

adagio	54—60
Andante	60
moderate	90
allegro	110—135
presto	135—160

この数字はほぼ現代の我々の概念と一致している。しかし標語に数字を直接結びつけるのには相当な無理がある。

<Andante とか Allegro とか云う速度指示をメトロノームの数字で一定することは殆んど不可能です。何故なら、同じ速度指示でも、割合に速い速度を指示したり、割合に遅い速度を指示したりして、非常に一定していないからです。然し極く大体から見て、四分音符一つ（特にそれを拍として）に就いて、40から60位が Largo, 100 から 126 位までが Adagio, 126 から 160 位までが Andante, 160から184位までが Allegro と云われるようです。

数字による速度指定は絶対です。それだけには正確ですが、また、それだけに窮屈でもあります。若し此の指定が楽曲の全体に遵守されるとすれば、その楽曲は固定化して生気を失います。音楽は正しいとか几帳面とか云うことよりも、先づ第一に芸術でなければなりません。それが芸術である為には美的であり、自由であり、情緒的であり、生気を持っていなければなりません。それが為には楽曲の速度は演出者の微妙な要求に従って不断に自由に變化されなければなりません。詰り、数字の速度指定は必ずしも常に守らなければならぬとは限らないし、絶対的に守られてもならないのです。それは標準的な指定に過ぎません。大体之に従うのがいい、又は少くとも安全ですが、之に囚われてはなりません。(門馬直衛著 楽典解説 pp. 110)。

門馬氏の数字は少し速すぎる様だが、メトロノーム数字の取扱い方に関する

意見には全く同感である。メトロノームの数字がいくつになったから *allegro* などとは云えない。その曲の音符の種類、各音符の使用率、拍子、様式等によって、或る曲は M. M. 100 でも *allegro* の感じになり得るし、或る曲は M. M. 132位でないと *allegro* の感じにならないかも知れない。結局数字だけでは決して、速度標語の意を尽す事が出来ない。小泉氏が *Andante* を極めて遅い速度としながら M. M. 80位と説明したり、クレールや真篠氏が *Andante* をほぼ 70—80位に扱っているのに対して、松本氏が *Moderato* を 70—80に扱っているなどという事がおこるのは、*pace* (歩度) と *character* (性質) とは別のもので必ずしも一致しないからである。性質としては *moderato* は節度のある感じ、*Andante* は安定した感じ、遅い方では、*lento* は少しだらけた感じ、*largo* は、のびのびした感じ、*grave* は厳めしい重苦しい感じ、速い方では *allegro* は快い感じ、*animato* は生き生きとした感じ、*vivace* は軽快な感じ、*presto* はあわただしい感じと言う事が出来る。前述の様にクルト・ザックス (Curt Sachs) は速度には生理的速度 (*physiological tempo*) と心理的速度 (*psychological tempo*) の二様があると述べている。(Rhythm and Tempo pp. 34)。

どの様な曲に、どの様な速度標語が用いられているか、その速度標語で示された楽曲の性格を表現するには、どの位の速度が、その曲については適当か、又著名な演奏家が実際に、どれ位の速度で演奏しているか、などの具体的な調査の結果は次の機会(続篇)に発表する。

参 考 文 献

1. 信時 潔著 標準楽典教科書 大正15年 大阪開成館
2. 岩崎民平主幹 研究社 新簡約英和辞典 昭和31年 研究社辞書部
3. John Purves A dictionary of modern Italian 1953年 Routledge & Kegan Paul
4. 小泉 治著 音楽辞典 昭和24年 東京堂
5. 音楽之友社編 音楽辞典(楽語篇) 昭和31年 音楽之友社
6. {Stephan Krehl著} {Allgemeine Musiklehre}
{信時 潔・片山頼太郎共訳} {音楽通論} 昭和2年 高井楽器店
7. 真篠俊雄著 音楽通論 昭和6年 東洋図書

8. 田辺尚雄著 音楽通論 昭和17年 富山房
9. 山泉茂太郎著 音楽通論 昭和33年 音楽之友社
10. {Lobe : Neumann 共著} {Katechismus der Musik}
 {橋本清司訳} {音楽通論} 昭和33年 音楽之友社
11. 松本民之助著 音楽通論 (東京音楽学校同声会通信教育テキスト)
12. 田村範一著 音楽概論 昭和31年 音楽之友社
13. 伊庭孝著 大楽典 昭和4年 白眉社
14. 門馬直衛著 楽典解説 昭和11年 春秋社
15. 属啓成著 楽典と楽式 昭和33年 音楽之友社
16. Curt Sachs Rhythm and Tempo 1953, W. Norton.
17. Grove Dictionary of Music and Musicians 1954. Macmillan.

A Study of the Tempo Indication

Résumé

There are several terms used for "Tempo Indication."

<*i.e.*, Grave, Lento, Largo, Adagio, Andante, Moderato, Allegro, Vivace, Presto etc.>

These terms, however, denote not only the pace of tempo but also the character of tempo.

<The word "tempo" covers two very different concepts. One, the real, physiological tempo, varies within the rather limited range of feasible steps and beats. The other one is psychological. It is less a tempo proper than a mood: the Italian word *adagio*, misused for a tempo, implies moderation and leisure; and *allegro* means, basically, gay and content (Curt Sachs, Rhythm and Tempo pp. 34)>

Various Music Theorists stated various different opinions about tempo indication. I investigated the subject and reached the conclusion stated in the paper.